

進路コミュニケーションも
日々のささやかな会話から

●私には高校生の息子がおり、父と子のコミュニケーションの難しさを日々実感しています。こちらからしゃべりかけると、「うざい」と取られることもあり、これから大学受験を迎えるにあたって子どもの希望をどうやって聞き出すか、今から心配です。相談相手は母親が最も多いというデータなどを見ると(図9、15P)、母親は上手にやっているのだなと思いますね。

●「進路選択の時期が来たから、子どもと進路の話しよう」と思い立って、会話を始めようとする、お互いに構えてしまいます。特に親は、あれも言わなきゃ、これも言わなきゃと、一度に言いすぎる。子どもに伝えたいことがあるなら、普段から小出しにするのがいいでしょうね。

●「保護者がよく使う言葉」(図4、12P)では、「自分の好きなことをしなさい」がもっとも多く、「勉強しなさい」は前回より減少したようですが、そうした親子コミュニケーションの雰囲気は、調査全体からもうかがえますね。子どもをなるべくほめようという意識が、保護者にずいぶん浸透してきていると

全国高等学校PTA連合会と小誌編集部による調査結果検討会より

子どもの進路選択に 今の保護者は 出しゃばりすぎか？



第6回「高校生と保護者の進路に関する意識調査」を合同で行った全国高等学校PTA連合会と小社は、データ集計を終えた2013年12月に調査結果検討会を開き、今回の調査を振り返りました。保護者の立場からはこのデータがどう見えたか。家庭で、また高校で、今後どのような対応をしていくべきか。さまざまな意見が交わされました。各高校において、この調査結果を保護者と共有する際の参考にしていただければと思います。

まとめ／荒尾貴正(本誌編集デスク)

会議出席者



北海道
山本富造



副委員長
毛利一朗



進路対策委員会・委員長
鈴木敏彦



常務理事・事務局長
池口康夫



副会長
三輪一朝



全国高等学校PTA
連合会・会長
相川順子



佐賀
小出邦彦



香川
泉 満



滋賀
藤居 敏



神奈川
安達秀子



東京
納見敏明



岩手
内舘茂

思います。

●私も日頃から「自分の好きなことをしなさい」と子どもに言ってきました。しかし、いざ子どもが進路を決断する際、私はその言葉を覆しました。子どもには進みたい道がありました。その子の将来を真剣に考えた時、その道は無理だろうと想像し、「NO」と言ったのです。その判断が正しかったかどうか、まだわかりません。ただ、そういう決断をした以上、親として重い責任がありますから、これからもずっと見守っていきたくと思っています。

人の成長に失敗は不可欠と 現代の親は腹をくくれるか？

●アドバイスを求める子どもが増えているようですが(図7、14P)、どんなアドバイスをすべきか、それぞれの親が考える必要がありますね。私の子どもには、とにかく広く世の中を見てほしいと言っています。人生の選択は子ども自身がすべきですが、世の中のことを知らなければ選べません。交友関係を幅広くもったり、さまざまな体験をすることを勧めたり、ニュースも見なさいと言ってきました。

●自分を見つめるきっかけを与えるのも親の役目のように思います。子ども

もたちは、まだ自分の適性がわかっていないから、「君って、正義感が強いよね」などと問いかけるのも有効でしょう。

●それ以上に、今回の調査結果からはアドバイスという範囲を超えて、「入試方法を調べる」「学校の見学に行く」といったことを自らする保護者が増えていて、今後さらに増加しそうというデータがありました(図30、28P)。これはどうなんでしょう？ 私は出しゃばり過ぎのように思いますが。

●例えば、「○○学部、受けたいんだ」と子どもから言われて、**学部学科の出身が名前だけではわからないようなケースが増えていきます**よね。「ああ、いいんじゃない」と口だけで言うんじやなく、内容をある程度知ってから子どもに返答するためにも、親自身が調べることがあり得るでしょう。だから、そうした親の行為をあまり否定的に見なくても良いのではないのでしょうか。

●実際のところ、今の大学入試は複雑すぎて、子どもだけでは到底理解できないと思います。うちの子どもの受験では、当初入試日や入試科目を本人が調べましたが、うまくいきませんでした。そこでやむなく親がある程度絞り込みました。

●今、高校受験の段階から同じことが起きていると思います。中学生は自分

だけでは高校を選べない。中学校には情報がない。だから結局、親が塾と相談しながら受験校を決めていく。そういうやり方や関係性が大学受験まで続くのでしょうか。

●実は、うちの子がこのあいだ、大学の推薦入試を1校受け損ないまして、「受けておけばよかった…」と本人は非常に青ざめていました(笑)。親として、過ぎてしまったことをとやかく言うのはやめたのですが、本人が自分の行動を無性に反省しているのを見て、悪い経験ではなかったのだと気づきました。昔の親はもつと子どもの失敗を認めてくれた気がしますね。人の成長に失敗は不可欠だとわかっていたのかもかもしれません。現代の親がそんなふうに腹をくくれるか、それが問われているように感じます。

グローバル社会への期待と不安

●これからの日本はどう考えても大変な時代を迎えると思っている私からすれば、「未来社会への認識」という項目において、**親子とも「好ましい社会」になるという数値が伸びているのは大きな驚き**でした(図23、22P)。理想を言えば、大人は子どもに対して現実

や将来の厳しさを伝えつつも、夢や希望をもたせる努力をしていくべきでしょうね。

●同感です。大人が「未来は明るい」と言っていかなければ、子どもに悪影響を及ぼしかねません。

●将来就きたい職業の有無(図13、18P)や目指している人・あこがれている人の有無(図15、19P)のデータを見ると、男の子のほうが、夢あこがれが少ないうちに感じました。われわれ保護者世代が、**経済成長は成功させたが夢あこがれを子どもにも育むことができなかった証**であると見ました。その点で、グローバル化による環境変化にも期待したいです。

●グローバル化については、その影響力を比較的多くの親子が意識しているように見受けられました(図32、29P)。しかし留学させたい保護者は、まだ少ないですね(図35、31P)。ここに経済面を含めた保護者の課題が表れていると思います。

●私の働く会社を見ても、**グローバル化は待ったなしの状況**だと思います。これから社会がどう変わっていくのか、子どもがそこで通用するのか、不安は尽きませんが、彼ら彼女らをしっかりと支えていく気持ち私たちはもち続けるべきでしょう。